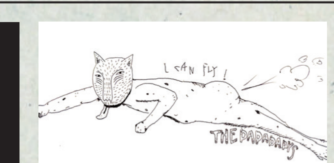
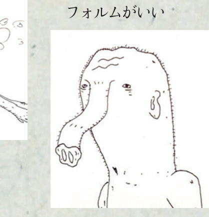
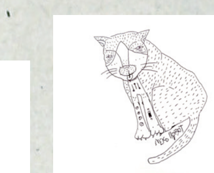
巨匠・儀間陽柄 幻の10作品を語る



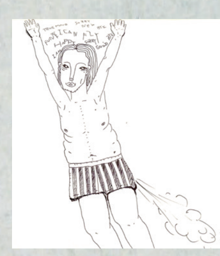
▲空も飛べる筈、屁を放って
水木しげるライクな屁のタッチ
を目指しました

▼エレファントマン
フォルムがいい



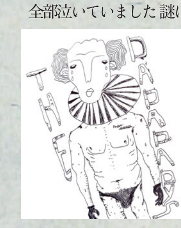


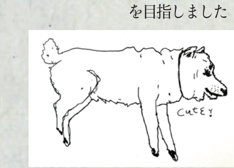
▲猫型ロボット
フェーダーがついてたりするけど鳴き声が変わるのかな



▲空も飛べる筈、自画像的なもの
いつかね。

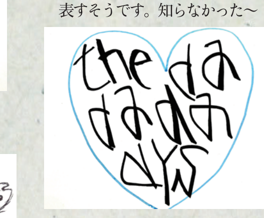
▼スイートメモリーズ
旧友を思い出しました
彼が描く絵は
全部泣いていました 謎に

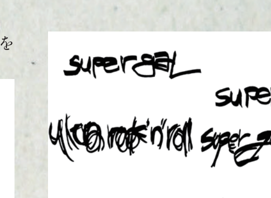




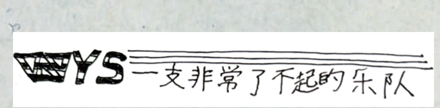
▲キューティー犬
太った三つ目の柴　ラヴぃ

▼青いハートは一般的に友情や信頼を
表すそうです。知らなかった〜

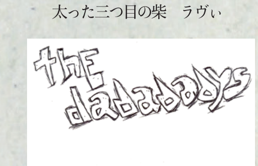




▲ウルトラロックンロールスーパーギャル
重複可愛くって結構好きなんです


YS 一支非常了不起的乐队

▲めっちゃすごいバンドみたいな言葉を
翻訳アプリで中国語にしたやつ
昔バイトで中国の荷物運んだ時にキュンときたのでオマった



▲Eだけ大文字になって描き直したやつ
白黒アー写Tシャツのロゴになってるよ

【お詫び】
小池貞利の新聞版「寝言は寝てyeah」
作者取材の為 休載いたします

独占告白 佐藤健一郎 アルバム制作時に聴いていた10選

1. Collections 01／Tebs
同アルバムのレコードを持っていて、少し前に大阪でたまたまCDを見つけて購入。お気に入りです。
最近アナログな方法で音楽を聴くのが少し贅沢な時間みたいになっていて面白いです。日常的にはサブスクを使ってストリーミングで音楽を聴きます。便利だし、他人のプレイリストとかもなかなか面白いです。今ではCDで音楽を聴くことは手間がかかるけど、少し不便な音楽の聴きかたも愛しく感じるし、スマホがいらないので落ち着いて聴けていいです。色々な聴きかたが増えてうれしい。当たり前は当たり前に変わっていくんだなー。

2. Midnight Menu／TOKiMONSTA
Tebsもそうですが、Brainfeederの面々はずっとファンです。このアルバムでは1曲目の「Gamble」、後半の「Bready Soul」と「Lovely Soul」の流れが特に好き。聴かないと寝たくないみたいな時期がたまにあります。でも最後まで聞く前にだいたい寝落ちします。いい関係です。

3. うれしくって抱きあうよ／YUKI
この頃は歌やシンセなど耳につくメロディを自分のプレイの参考にすることが多い気がします（ベースの耳コピいまだに出来ないので。）。そういった流れからか、「+天竺」はあまり決まり事にとらわれずにバック出来て良かったです。決まり事を守るのも好きですが、バランスというか、面白い方にベットというか、そういうことです。
YUKIさんのアルバムは曲の中に主役がいっぱいいて楽しいです。

4. 手／teto
過去の作品を聴き直すことは時々あります。制作中、なんとなく気持ちが盛り上がって初めてのバンドで初めて作ったフルアルバムを聴きました。初心はとっくに忘れていましたが、当時より良い聴き方が出来た。そういうことって時間が経つごとに増えていったらいいなあと思いました。経験的にも物理的にも人生の財産的な存在のひとつです。

5. Awake／submerse
10年ほど前に自分の誕生日プレゼントに買ったもの。こじつけのようですが、不思議と10年前くらいの自分の文化がいまの気分です。20代前半の頃って暇はあるのにお金はないし、やりたいこともよくわからない。5畳の部屋で少し気取った感じの、曇った感じの、気だるいビートとなんとなく過ごすのが日常でした。
令和的にいうとエモみのあるアルバムなのです。そしてチルりたいときに流してます。

6. Ties／Loop Junktion
日本の生バンドのグループのラップで最初に好きになった方々。知った時には解散していたけど、見聞を広げてくれました。
音楽だけではないのですが、若い頃は夢中になっていたものから距離をとりたくなることがありました。詳しくいえばその自分から距離をとりたい、みたいな。周りに合わせたり、恥ずかしがったり、変に大人ぶったり、「あの人の方が詳しいから、」とか妙に後ろめたくなったり。勝ち負けではないのに。
「好き」の感情って相対的なものでなくて、絶対的なものだから、周りとかマジどうでもよくね？ってことに本質的に気付くのことにはわりと時間がかかりました。
聴いていたらそんなことをふと考えました。音が鳴っていないところにも音を感じる、好きなアルバムです。

7. SNS（Super Natural Sequence）／DubbyMaple
4つ打ちダンスビート、ブレイクビート、エクスペリメンタルな要素など様々な味が詰まっているDubbyMapleのビート。好きなところはいろいろありますが、チョップの仕方、印象的な音色の使いかたが気持ちいいし、いまだに面白いです。
私はもともと音楽好きな人間ではなかったのですが、友達が好きで、人が好きで音楽が好きになって、バンドも初めて、いまに至るみたいな人間なので、人間性がユニークに詰まっている音楽に惹かれがちです。

8. Soul Session／Michita × hairo
17歳の頃によく聴いていたアルバム。聴くとえもーくなります。三十路越えたあたりから、昔聴いていたアルバムを見つけたら買い直して聴く趣味をみつけました。そんなにお金もかからないし、なかなかいいです。

9. The Best Of Sade／Sade
自分の心がくすぐったくなるような、きゅんとするような音や曲が詰まっています。Rhodesっぽいあったかめのシンセの音だったり、繊細だったり大胆だったりするコーラスワークだったり。最近だとリミックスアルバムの曲を仕込む時に参考しました。
夏にSadeを聴くことはなんだかオツな気がするし、ちょっとしたお洒落をして出掛けるような、身の丈に合った背のびみたいな感覚がして好きです。

10. Renaissance／ペトロールズ
同じ曲でもその時々の自分のモードや身を置く環境によって聴こえかたが変わりますよね。その時にしっくりくる聴こえかたがするようオートフォーカスされる気がします。楽器を持つ前はベースを意識して聴いたことはありません。聴こえたことあったかな？
私は「音楽好き」というよりは、「音好き」ってタイプです。どの楽器もそうですが、一音の長さなど所謂音価的な部分や音の置き場所、音同士の掛け合いとか差し引きとか、一聴すると不協和なのに絶妙なバランスで成り立つセクションとか、センスの良いサンプリングとか、聴きかたによってどきどきする部分は山ほどあります。
人間が作っていることを考えれば、作り手の歴史や哲学を想像しながら聴くのも楽しい聴きかたのひとつです。そういうところに音楽の本質的な奥行きがあると思っているし、浪漫を感じます。
このアルバムも、他のアルバムも「+天竺」も、これからまた歳をとってさらに時間が経ってから聴くのが楽しみです。
ただCDを聴くだけの時間ってあまり取れないけど、いまはそういう時間をあえて作るのが結構好きです。

ウラ・アカ・トールの 星占い 2025年下半期

星座	仕事運	恋愛運	金運
牡羊座（3/21~4/19）	○（新しい挑戦が吉）	△（タイミングがズレやすい）	○（堅実さで安定）
牡牛座（4/20~5/20）	◎（努力が認められる）	○（穏やかに進展）	◎（蓄財・投資運が強い）
双子座（5/21~6/21）	△（方向転換の兆し）	○（出会い運はある）	△（衝動買い注意）
蟹座（6/22~7/22）	○（人間関係に恵まれる）	◎（良縁や進展に期待）	△（交際費で出費増）
獅子座（7/23~8/22）	△（停滞感、焦らず準備）	×（誤解やすれ違い注意）	△（見栄遣いに注意）
乙女座（8/23~9/22）	○（堅実な努力が報われる）	△（気持ちが伝わりにくい）	○（節約・管理で安定）
天秤座（9/23~10/23）	△（バランス調整が必要）	○（チャンスは秋頃）	△（人に流されやすい）
蠍座（10/24~11/22）	◎（大きな成果の予感）	○（誠実な関係が深まる）	◎（臨時収入やツキあり）
射手座（11/23~12/21）	△（方向性を見直す時期）	△（情熱と冷静さのバランスを）	○（アイデア収入に期待）
山羊座（12/22~1/19）	◎（リーダーシップが光る）	○（安定した関係性が築ける）	◎（堅実に増やせる時期）
水瓶座（1/20~2/18）	○（新しい仲間と良い流れ）	△（気まぐれに注意）	○（堅実な出費管理で安定）
魚座（2/19~3/20）	△（周囲に振り回されやすい）	○（直感が良縁を呼ぶ）	△（忘れ物・損失注意）

~最強運~
蠍座・牡牛座・山羊座
仕事・金運◎

~恋愛好調~
蟹座・蠍座
縁や進展の可能性大

~注意星座~
獅子座
恋愛×、仕事停滞

アルバムにコメント相次ぐ

天竺新聞

令和の恥晒氏 ダダダディーズ

古舘佑太郎 さん
(ex.THE 2)

『+天竺』を聴いたら、ノスタルジックな気持ちになると思っていた。思い出は今も鮮やかだ。ライブハウスで凌ぎを削ったあの頃。友達と呼ぶにはあまりにもお互いトゲトゲしていた。時を経て、tetoはthe dadadadysとなり、THE 2は解散した。ダダダのステージではyuccoがドラムを叩き、儀間がギターを弾いている。
みんな僕の古い仲間たちだ。そんな彼らの新譜。てっきり、ノスタルジックな気持ちになると思っていた。ソロミュージシャンとなった僕はバンド時代を懐かしみ、ルサンチに酔いしれるはずだった。全10曲。そんな余裕は一切なかった。未来にワクワクしてたら聴き終わってた。そういや小池さんって思い出話とか大嫌いな人だったわ。

CHIAKIZZ さん
(DVCEX a.k.a でぶコーネリアスEX)

抜けて染みる、この作品はいきなしまっすぐ地獄行きだ。その景色は過ぎてはまた過ぎてゆく、何度も聴きたくなる展開だ。マジでホォリィ嫉妬するダダダディーズ全員の優しさと狂気がサウンドに表れている。彼らが起こす限界突破のライブも素晴らしくて熱くなる。またやろうぜ、魂のつかみ合い。

ダダダの新しいアルバム、聞かせてもらいました！色んなジャンルがクロスオーバーしまくり、畳み掛けるグンメロ（グッドメロディー）そして小池貞利の捻くれた言葉からずんだ◯んまで全て盛り込んだ大乱闘スマッシュブラザーズみたいなアルバムでした！要チェケラ

しのだくん さん
(トップシークレットマン)

トラックメーカー DubbyMaple さん

「喜怒哀楽」の細かいやつ
先ず、「+天竺」リリースおめでとう御座います。
ベースの佐藤健一郎（以下、けんちゃん）は僕にとって高校の同級生であり、同じ音楽家であり、苦楽を共にした親友であります。
けんちゃんって、基本情報量が少ないんです。
基本は喜怒哀楽を表に出さない。腐れ縁をやらせてもらっている僕でも、時々けんちゃんがわからなくなる。
わざと情報を小出しにしてるのか？と思う時だってある。
けんちゃん「彼女と別れたわ」
僕「なんで？」
けんちゃん「いやなんか、蝉が、ね。」
こんな会話を、夜の戸田公園でした気がする。
本当に、全くの謎である。そんな圧倒的情報量不足のけんちゃんが、なんと、ベースを通してこんなにも「喜怒哀楽」を表に出しているなんて。いや、喜怒哀楽の細かいやつ、甘いと塩っぱいで「甘ジョッパイ」みたいな。コオロギでもキリギリスでもない「コロギス」みたいな。「喜怒哀楽」よりもっと細かくて、深いところ。そんな粒子みたいな感情を、弦に乗せているではありませんか。
おじさんは大変感動しました。
同じ音楽家として、同じ田舎出身のコンプレックスマンとして、これからも近くで応援できることを誇りに思います。
けんちゃん、おめでとう。

KG さん（小池の友達）

貞利らしくてよかった。
けんいちにも会いてえや。

the dadadadys マネージャー Y

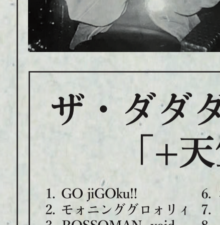
わからなさに圧倒されながらも切り捨てず、そのズレすらも面白がってみる。
『+天竺』は、そんな楽しみ方を自然と引き出してくれたアルバムです。
一聴すると情緒不安定にも、つかみどころがないようにも感じる作品。でもその不安定さの中にこそ、端と端ではない「中間」の面白さを見出せる瞬間があるかもしれません。
「伝わりすぎないけど、わかりづらいことを美徳ともしない。」
そんな絶妙なバランスの中で、今のthe dadadadysがみせる振り幅を、面白がってもらえたら嬉しいです。
(深夜4時に目が覚めて急に聴きたくなった曲が「らぶりありてぃ ―la dolce vita―」で、真っ暗な部屋でまだmix段階の音源をリピート再生しながら、泣いちゃいました)

熊谷太起 さん
(Helsinki Lambda Club / Group2 / Guiba)

あのね、
Lﾘﾘｰｽの(σ゜∀゜)σ数ヶ月前⊇゛
さだﾄｼｶ・ら(pq♥∀<。)「ﾁｮ→自信作ﾃﾞｷたから聴いて！」
って連絡ｷたのっ！☆
で、音源が(●´･ω･●)不具合で聴けなかったから
「もっかぃｨ送って〜！」ってお願いしたんだｹﾄﾞ
何故か(●´ω`●)送ってくれなかったまま
無事Lﾘﾘｰｽされてたのワロたｗｗｗ
Lﾘﾘｰｽおめでとーっ！(pq*´∀`)♥♥
笑いあり涙ありって感じで、
今のdadadadysみんﾅの(☆∀☆)ｲｲところが出まくってる
ｽﾃｷなアルバムだと思うっ！
結成初期にちょこっとだけ(σ･∀･)σサポートさせてもらったり
個人的にマジ他人事とは思えない特別なバンドだｶﾗ
これからもずーっと(人´∀`).☆.。.:*･ﾟ応援してるし
みんﾅの幸せと健康を(人´ω`).☆。.:*･ﾟ心から祈ってるｶﾗ！
これからもヨロシクねぇ〜↑↑(≧▽≦)/♥♥♥

写真家 小杉歩 さん

やるせなさを感じながらも今をただ生きる人にきく栄養剤のように感じた。
生きていると良い時もあれば悪い時もある
しかしほとんどの時間はどちらでもない時だと思う
今をただ生きる時間
その時間が長くなればなるほど物事に対して何も感じなくなってくるけれど
the dadadadysならきっとこれからも心を動かしてくれる
そう感じさせられたアルバムでした。

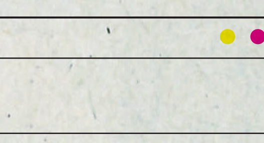


ピックアップ　初の写真集「七変化」PR

魔性の女
yuccoが魅せる
7つの物語

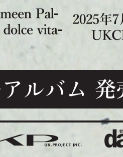
映像監督 佐藤祐紀 さん

the dadadadysの皆様「+天竺」リリースおめでとうございます。
初のCDリリースめでたい！ということで、久々にリビングのCDプレーヤーで再生しました。
再生してすぐ愛犬が吠え出した。
あまりに吠えるからヘッドフォンで最後まで聴いた。
中学生の時親に隠れてパンクとかロックとかを大きい音で聴いていた時のこと思い出した。
あの時の自分はきっと好きだろうな。
今の私ももちろん好きです。
新しい景色沢山見せてくれることを楽しみにしてます。
これからも転がり続けて
そしていつでも巻き込んでください。



10月10日
恵比寿で待つ

ザ・ダダダディーズ 「+天竺」

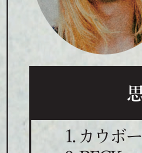


1. GO jiGOku!!
2. モォニングロォリィ
3. ROSSOMAN -void-
4. rock'n'roll ぎゃる
5. 恥晒氏
6. ホォリィ・嫉妬
7. king of gelato
8. しゃらら -Taale Zameen Pal-
9. らぶりありてぃ -la dolce vita-
10. 吾亦紅

2025年7月9日 発売
UKCD-1247

10曲入りファースト・フルアルバム 発売中

山岡錬の 十選を十選



ザ・ダダダディーズの金髪ロン毛担当。ギターも弾く。

自分が思うthe dadadadysを表す四字熟語 十選

1. 徹頭徹尾
2. 自由奔放
3. 天真爛漫
4. 猪突猛進
5. 奇想天外
6. 遊戯三昧
7. 哀糸豪竹
8. 一目瞭然
9. 一虚一盈
10. 勇気凛凛

四字熟語をかっこいいって思う感覚は最も忘れないようにしたい感覚の一つです。

好きなウディ・アレン映画 十選

1. マッチポイント
2. タロットカード殺人事件
3. 世界中がアイ・ラブ・ユー
4. ブロードウェイと銃弾
5. さよなら、さよならハリウッド
6. マジック・イン・ムーンライト
7. ウディ・アレンの夢と犯罪
8. おいしい生活
9. アニー・ホール
10. マンハッタン殺人ミステリー

『世界中がアイ・ラブ・ユー』のラストシーンがこの世で一番美しいと思うのですが、そこ以外はあまおもろーない。ただ、終わりよければ全てよし！人生です。

思い出深いTVアニメ 十選

1. カウボーイビバップ
2. BECK
3. 彼氏彼女の事情
4. アベノ橋魔法★商店街
5. プラネテス
6. 宇宙のステルヴィア
7. ガンパレード・マーチ 新たなる行軍歌
8. あずまんが大王
9. ラムネ&40炎
10. 日常

テレビ大阪、水曜の深夜、『宇宙のステルヴィア』の次に放送されてた『BECK』を観て音楽に興味を持ち始める事になるんですが、それまではアニメージュや声優グランプリを読むほどの強者でございました。

たまに口ずさんでしまう曲 十選

1. 日本人は胃腸が弱い / ネプチューン
2. HIT IN THE USA / BEAT CRUSADERS
3. ひとりじゃないの / 天地真理
4. Picture book / the kinks
5. STEPPERS DELIGHT / RIP SLYME
6. FUNKASTIC / RIP SLYME
7. JOINT / RIP SLYME
8. Natsuno / くるり
9. トンネルぬけて / BO GUMBOS
10. ン・パカマーチ / 徳光由香

歌は得意ではないんですが、掃除してる時とか料理してる時には鼻歌まじりに口ずさんでいます。

好きなギタリスト 十選

1. ジョン・スクワイア
2. ポール・ギルバート
3. ジミー・ペイジ
4. ジョージ・ハリスン
5. デレク・トラックス
6. バディ・ガイ
7. トム・ミッシュ
8. ウェス・モンゴメリー
9. 内田勘太郎
10. ジャック・ホワイト

ジョン・スクワイアは言わずもがな。見返してみると内田さんやジョージ、デレクもが、ボトルネック奏法をしてる人が好きなのかも。

好きな漫画 十選

1. それでも町は廻っている / 石黒正数
2. プラネテス / 幸村誠
3. 金色のガッシュ!! / 雷句誠
4. シャーマンキング / 武井宏之
5. blue / 魚喃キリコ
6. いい電子 / みずしな孝之
7. キーチ!! / 新井英樹
8. あかね噺 / 末永裕樹、馬上 鷹将
9. いちご100% / 河下水希
10. メダロット / ほるまりん

それ町は経典。小学生の頃、いちご100%を買うのが恥ずかしくてドラえもんの1巻と一緒に買った記憶があります。向井こずえ推しです。

好きなテイルズオブシリーズ 十選

1. シンフォニア
2. エターニア
3. デスティニー
4. デスティニー2
5. アビス
6. リバース
7. なりきりダンジョン2
8. レジェンディア
9. ファンタジア
10. ヴェスペリア

「君と響き合うRPG」ってキャッチコピーには心撃ち抜かれましたね。コレット推しです。

好きなアトラス作品 十選

1. ペルソナ5
2. デビルサマナー ソウルハッカーズ
3. 真・女神転生デビルチルドレン 黒の書
4. DIGITAL DEVIL SAGA アバタール・チューナー
5. デビルサマナー 葛葉ライドウ対アバドン王
6. 真・女神転生IV
7. キャサリン
8. 九龍妖魔學園紀
9. 真・女神転生III
10. ドラゴンズクラウン

デビチルに始まり英才教育的にアトラスシリーズはけっこー身近な存在だった。友達の家でやったソウルハッカーズは悪いことをしているような感覚になってドキドキした。大人への第一歩。

一度は乗ってみたい憧れの車 十選

1. 180SX(日産)
2. スプリンタートレノAE86(トヨタ)
3. スカイラインGT-R34(日産)
4. MR2 G-Limited(トヨタ)
5. ランサーエボリューションIII(三菱)
6. シルエイティ(日産・改造車)
7. カプチーノ(スズキ)
8. シビックSiR-II(ホンダ)
9. インプレッサWRX STI(スバル)
10. アルテッツァ(トヨタ)

中学生の頃の愛読書はカーセンサーとかの中古車紹介雑誌だったんですが(150円ぐらいとかで安かった)放課後に友達と欲しい車に赤ペンで丸を書いてる時間が一番楽しかった。

『それでも町は廻っている』の好きな回 十選

1. 第10話『カマボコ　ボヨン　ボヨン』
2. 第13.14話『それでも町は廻っている(前後編)』
3. 第16話『ナイトウォーカー』
4. 第31話『一ぱいのミシンそば』
5. 第56話『テリトリー』
6. 第65話『さよなら麺類』
7. 第70話『大人買い計画』
8. 第84話『夕闇の町』
9. 第99話『張り込み』
10. 第110話『お姉さんと一緒』

主人公の歩鳥には猛と雪子という兄妹がいまして、その2人がとてもチャーミングで愛おしい存在なんです。第16話の『ナイトウォーカー』は弟の猛が夜中、家を出て行けない時間にお姉ちゃんの歩鳥と一緒にこっそりコンビニに行くお話。時間帯が違うだけで、いつもの町が未知の世界に見えてくる子供時代のわくわく・どきどきがよみがえってきます。

あとがき

十選を十選やるという無駄に作業量があることをさせてもらったんですが、意外にも楽しくて、夢中で昔の記憶を引っ張り出したり、引っ込めたり、出てきてほしくなかったなーって記憶が出てきてはそっと奥の方にしまい直したりしていました。思い出と作品、物事は細くてもしっかり繋がってんだなと思ったり。まさに誰が興味あんねん！と言われてしまいそうですが、そういうことが実は大事だったりしますから。
さぁ、はたして『+天竺』発売を記念することになったのだろうか！
少しでも、楽しんでいただけたのなら幸いでございます。

キリトリセン

触れ愛広場

あなたの声をお聞かせください

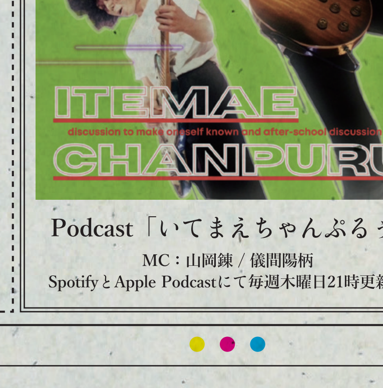
はじめまして。ザ・ダダダディーズです。今日は、この新聞を手にしてくれてありがとうございます。ザ・ダダダディーズについて、皆さまからのご意見、ご感想をぜひお聞かせください。

●ザ・ダダダディーズのライブの感想

●ザ・ダダダディーズの好きな楽曲

●共演してほしいアーティスト

性別：　　年齢：　　切り取ってスタッフまで渡してネ♡
アンケートにご協力いただきありがとうございました


THURSDAY
EVERYWEEK
21:00
the dadadadys : ren yamaoka , youhey gima
UKP
ITEMAE
discussion to make oneself known and after-school discussion
CHANPURU

Podcast「いてまえちゃんぷるぅ」
MC：山岡錬 / 儀間陽柄
SpotifyとApple Podcastにて毎週木曜日21時更新中

ピックアップ　初の写真集「七変化」PR

#彼女とデートなう
に使っていいよ

yucco

天竺新聞　編集：軽部徹 / デザイン：田村千里

アルバム「+天竺」にコメント殺到

なんだか心の底から夏が愛おしくてたまらなくなった
眩しくて熱くて、カラッとしてるかと思ったらなんだかジットリしてたり、切なかったり
そういうところに夏を感じる要因があるのかと考えたり（単にリリースが夏だからだとしたらヤバい）
俺、日本史選択だったからよくわかんねえけど、天竺ってとこは寒くないんだなと思った、半袖で行けそうで嬉しい

蛇足
月並みな感想で、心臓は撃ち抜けずとも、体にすら掠らずとも、なんか今音したな!?って一瞬でも目に留まってくれたらいいなと思う、昔から運動音痴なもんで…
本当にファーストフルアルバムありがとう
これからも応援してます
（純）

「地獄を求めて三千海里——the dadadadys『+天竺』航海記」
ダダダディーズ10作目にして、ファーストフルアルバム『+天竺』。
10曲それぞれが、まるで風変わりな船長に率いられた10艘の異形の船。その舳先は、悲しみも笑いも丸呑みにして爆走する、令和の不景気な海だ。
「GO jiGOku!!」が鳴った瞬間に、すべてが始まる。Welcome to Hell。
MMOを生き抜くような日常に、ジョークと狂気と優しさをぶち込んでくる冒頭曲は、ふざけてるのに切実。ダサくてカッコいい。「ホォリィ・嫉妬」の血湧き肉躍るアジテーション「吾亦紅」のしんみり滲む余白に至るまで、"起承転結"の見事なうねりがある。
この10曲、まさに「母をたずねて三千里」。いや、「地獄を求めて三千海里」。
"恥晒しな厚顔無恥共"でも、"らぶかつ、ウィットに富んだロック"で、地から天（ten）へと"いざ、ゆかん"というメッセージが滲む。
1曲1曲がギリギリの場所からの告白であり、らぶりありてぃな現実逃避であり、希望と絶望の綱引きだ。
特に響いたのは、「ROSSOMAN -void-」の"ギリギリ握り生きる"という哲学。人生、何かを失うたびに軽くなり、でもなぜか前に進める気がする。
「rock'n'roll ぎゃる」の"無理しない美学"にも胸打たれたし、「しゃらら」では甘酸っぱくも粋なラズベリーが涙腺をひと突きする。
爆発よりも、誰かの歌を聴いてみたい。そんな夜が誰にだってある。
このアルバム、ジャンルにすら愛想を尽かした独自の航海日誌だ。200海里の排他的経済水域すらぶっちぎって、ナウいヤング共の耳を揺さぶる。これはもうロックじゃない、"dadadadys"ってジャンルだ。刮目せよ。
this is rock'n'roll.
this is dadadadys.
Welcome to Hell　天竺はまだ遠い。でも、この10曲が確かにあなたの羅針盤になる。
そしてその先に、たしかに天竺がある。
（kairi）

どうなってるんだ。生活も世の中も閉塞的で悪化の一途。ぎちぎちと窮屈な直方体に囲われた息苦しさの中で、どこへ向かえばいいのだろう。そんな地獄を突き破らんばかりに怒り泣き笑う大人ガキンチョ五人衆がここにいる。十曲十色、四十分で目指すはあの理想郷。the dadadadys 1stフルアルバム『+天竺』。
ネオ東京的ディストピアに近づきつつある荒れ模様のもと真打ち登場。あたかも無軌道に見える奔走が奏効し、滔々と妄想弄す天竺に到着どころか上位存在・+天竺を創造しちゃいそうな様相を、さぁご照覧あれ。
無根拠にも根底的には生を肯定し、地獄に向かう号砲を撃ち鳴らす1曲目は「GO jiGOku!!」。それらしい厭世主義にも、あからさまな楽観主義にも陥らずthink and feelな知性感性フル回転ダンス。諦念色濃く掴んだ真理と共にゲーム、アニメにまつわるワードやらなにやら喚き散らし、暴れ回る音々。
思い出すのはコントローラーをガチャガチャ動かし必殺技を乱れ撃つ子供心。溜めて溜めて溜めて放たれるサビではキヨシローの如く潔く居直ったメロディーと詞。会心の解放感。一二三四でアホになり、カウントダウン後はニヒルに笑ってみせたかと思うと、すぐさま冷めた確信と共に踊り倒す。人間失格だと考え込みながら歌い踊る。一聴ではなにがなんだかわからなくとも気持ちは良い。ハチャメチャな転調加減やジャケットデザインからは近代の名ロックバンド、Black Midiも想起させられる。Black Midiのラストアルバム4曲目は「Welcome to Hell」。the dadadadysはファーストアルバム1曲目で共に地獄へゴーする覚悟あり。聴けばなぜだかデッカい気分になれる曲だ。
ハハッと笑う声色は諦めたように乾いた響きや、寛大にあたたかい響きを有する場合があるが、『+天竺』からはそのどちらの響きも聴こえてくる。
まあノれないこともないけど……みたいなあれこれ、アンビバレントな心情さまざまをわかち合えるようでもある作品群だ。
如何せん思い通りいかん生活を踊り明かさんとする2曲目「モォニングロォリィ」。スカパンク調にグチャグチャ、かつ緻密にも思える構成とポップなメロディーに乗る歌詞は、混迷極めた生活の荒れやこれや。あの星月夜への逃避行も雲散霧消、無惨な現実に無事不時着の日々。メロウなサウンドに伴うフロウは低温度。落ち込みそうになったらワハハと笑おう、それでも駄目ならセックスしよう。なんとか楽しもうと必死。マジでneed little time to wake upな出勤日にこの曲。華やかな彼奴ら横目に堕落する冷ややかな休日にもこの曲。曲名を見てOasisを思い出す方も多かったと思うが、実際に曲を聴くと90年代日本のスカパンクバンド・Fruity&『鉄腕アトム』への憧憬か?とも。Oasis「Morning Glory」→Snotty(元銀杏BOYZのチン中村がメンバーであったスカパンクバンド)「Nishiogi-Sunrise」→その影響源のFruity「Rock Steady Stew」、みたいな連想ゲームも込められているのかな?というような勝手な妄想、憶測を含めたり無視したりもできる、色んな脳が楽しく狂おしく聴かせていただける代物。終盤を飾るのは、幸せだとは言えないが不幸ぶることもできない場所に均質的に流れ着いてしまった私たちの行進曲。teto時代の名曲「暖かい都会から」の終盤と同じく、喧騒に沈む労働者の様を言い表す。やるせない、よるべない、動けない。でもダダダディーズはなんかふざけている気もするし、塞ぎ込んでばかりじゃ阿呆らしい?
脳を侵された週末が明けると全部無くしてまた終末。馬車馬ばりに働くばかりな娑婆からさようなら、3曲目「ROSSOMAN -void-」。メンバー脱退、バンド改名後1発目に出されたシングル曲のリアレンジ。再出発に相応しいサウンドと詞。アリからキリギリスとなって依然ギリギリなサマ。それでもそうして生きていく意志。Chuck Berry、Pixies、The Libertines、THE HIGH-LOWS、あぶらだこ、Nirvana。数多のロックの名曲を思い出しつつ、そんなことはすぐさま忘れて白目ひん剥き痙攣してしまうリフ、声。全部無くした俺がここにいるのだと、がなる、笑う、怒鳴る。ただ恥晒すことは厭わない彼らthe dadadadysに堕罪糾すような意図は無い。わやくちゃアンサンブル。夜風が肌を撫ぜた途端、曖昧な輪郭と空洞を悟る。そんな時はこの曲と一緒に狂い踊ろう。
恥も汗もかいて空っぽになったのち標榜される銘としてパーペキ、ROSSOMANの相棒としても最高な4曲目「rock'n'roll ぎゃる」。ここまでの3曲は小池貞利の作詞・作曲・ボーカルだったが、こちらでは儀間陽柄にチェンジ。大したものは何も無い、しかしガラクタみたいな宝物と根拠なき楽観は有る気怠げチョベリグソング。おおらかに生命力をもった響きのドラムがとってもマッチ。これまでにリリースされてきたthe dadadadysの曲からも感じられる、真面目に不真面目なギャルみを集約してドンズバ突いたような詞。
人間は、複数の小さな自分がスライムのごとく集まって構成されたキングスライムのようでもある。ブチギレる自分、感動する自分、諦めたがる自分、心から笑う自分、エトセトラ。このアルバムにもそんな面があるような。大きな情動があってもすぐさま俯瞰して平常心に戻るのは、ひとつの感情を冷めた目で見つめる自分が大勢いるため。しかしそのうち1人をロックンロールなギャルにしてしまえばもう少しマシな気分で、素直に直情的に生きられるかもしれないな、と生活の指針のひとつにさえなる曲。いつも心にrock'n'roll ぎゃる。
音韻気持ちよく軽やかながら、実は拗らせ捻くれたボロボロの心情、rock'n'roll ぎゃるちゃんと隣合わせな存在の5曲目「恥晒氏」。重心もって跳ねるように駆けていくリズム隊とそれを後ろ盾に好き勝手遊ぶギター。ポップでパンクなギターソロが最高に痛快。teto「とめられない」と通底した哲学も伺える。EP収録の「♡」を基調に「nante kotta」などを混ぜ合わせ、よりカオスにアップデートしたような内容にも感じられる。傷も汚れも、出生が孕む矛盾も抱えて100%開き直り切れないまま歩む。不健康趣味に陥らず、これからも覆され続けるのだろう、と歩みを続ける。
アキ・カウリスマキ映画に垣間見えるような冷たいリアリティ、北野武映画のようなユーモラスかつハートウォーミングにドンパチかます血生臭い理性と熱情が入り乱れるアルバム。そしてその中にあるべき曲。俺も俺の死を死にたい。そうありたい。なんかふんどし履かされて、望まぬ土俵ではっけよい。それでもなんとかやるっきゃない。訳わからないまま急いでは過ぎる毎日を共に駆けてくれるような1曲だ。
B面1曲目ともいえる6曲目「ホォリィ・嫉妬」はなんだか支離滅裂で混沌とした夢を見ているようでもある。はじまりはダイジェストのような、土砂降りに閉じ込められているかのように籠った響き。それが終わるとSoul Gloなどのファストでカオスなハードコア、はたまたDeath from Above 1979などのダンスパンクまで思い返せる激しいサウンドの幕開け。「こんな場所じゃなくて一緒に天竺みたいなとこ引っ越すぞ!」と叩き起こし連れ出すかのよう。そこにはThe Fratellisばりの阿呆らしいコーラスも添えられている。ベースのサウンドがダーティな空気感を引き立てる。ネット、オタク文化を通過した馬鹿馬鹿しさや知性が同居したユーモア。偏った怒りや自他共に向ける鋭い視線。突拍子ないようで整合性も感じるコラージュのおかしみ。耳からニコ動MADを流し込まれているような感覚もある。意識的にも無意識にもまっすぐにはならないしなれない人たちの愛情。これは『+天竺』を通して聴いての感触でもある。高速化サーフロック風味な間奏、ペチャクチャ舌鋒鋭いラップ、晴れやかに泣けるサビを経た終盤はノイジーにワルツ調、子守唄で微睡んでいくかのような展開。寝る間に時は進んでいくことを示すかのような針の音。このまま眠れば気持ちいい、でもやることあるんだよな、でも眠い、あー寝てしまう。そんな寝落ちの心地を思い出させる。つまりこれって夢オチ?それってどうなの?やかましいよこの糞。
嫉妬、憎悪に倒れたら淡い夢みたいな愛情を。日光、猛暑に焼かれたら甘い冷たいジェラートを。よだれ垂らして時空越え、思い描くはあの晴れやかな夏模様、7曲目「king of gelato」。胸がはち切れそうなパワーポップ/ギターポップサウンドと涙腺緩むメロディー・詞。前曲からの連なりで、良い夢を見ているかのような感覚。ふわりと潮の香が漂っている気もしてきちゃう。イントロではWeezer「Smile」、Superchunk「Hyper Enough」「Teenage Fanclub「Commercial Alternative」など、奇妙な間奏とアウトロではWeezer「Undone - The Sweater Song」などが思い返されたりするものの、それらとはまた異なる青さで突き抜けてゆく音像と甘いボーカル。"おやすみ"と告げるDメロは盟友、Helsinki Lambda Clubの「NEON SISTER」も思い出され、キュンと胸が締めつけられる仕上がり。"氷菓"というワードではあの名作アニメ、過ぎ去った青春を思わせる。歌詞や歌詞カードのデザインなどから察するに、愛犬に向けた曲だろうか。そうであれば、このアルバムでストレートに"好き"という言葉をぶつける初めての曲が愛犬を相手どったものというのはおもしろい。同じく愛犬に歌うteto「マーブルケイブの中へ」を経て、今やスカさない大人になりつつあるということだろうか。逆に嘘くさく思えるほどのピュアネス。しかし確かに切実。
固定観念、クリシェ、胡散臭さや潔癖症に満ちた空気からぶち抜けて、都度都度個々でわかり合い燥ぎたい。8曲目「しゃらら -Taale Zameen Pal-」はそう思わせてくれる。奇天烈に思える歌詞に笑ってしまう瞬間もありつつ、不思議な寂しさとあたたかさを強烈に抱く。映画『ゴーストワールド』や『バグダッド・カフェ』などとも通ずる感覚。思い切り「さくらさくら」なイントロは、ラブリーなアニメのようでもある親しみ深い歌詞世界と、6曲目から連なる夢の延長線上のような心地にもジャストフィット。元々は儀間が作詞・作曲であったところ、小池が作詞として手を加えた曲とのこと。人生を歩むに連れ、なにかが失われていく瞬間や、やむを得ずなにかを捨てる瞬間などがあるだろう。この曲では、現代の目まぐるしい物量感でもって見失われ続けるそんな無常の感をスポイルしない。それでいて、ふたりにとってはある自由を失う選択が自然であり、寧ろ前向きな響きをたたえている。各々の誠実さを纏わせ、時にインモラルに生き抜く。再開発のように表面的に打ち立てられ続ける美意識をすり抜けて走るふたりは、とてつもなく煌めいている。聴いているこちらが抱く思いは、ロックスターへのそれと近しい。この曲は異形な詞にも思えるが、キャッチー&ポップなサウンド、メロディーと五者五様の力強さによるものなのか、奇を衒い過ぎた感がない。
絶妙なバランス感覚で聴いているこちらの手を順当に引っ張って、どこか遠く連れていってくれるような心地。
幻想的な終盤ではそんな夢見心地を助長させながら、『+天竺』の核心に迫るようでもある英詞を紡ぐ。素晴らしいラブソングは親しい者への想いだけでなく、音楽から聴き手へ向かう想い、聴き手から音楽へ向かう想いにまで共鳴し得る。
受け取ると同時に発する。消費し、消費されるだけでない関係の細やかな美しさを知る。ライブハウスで「忘れた」や「拝啓」、「光るまち」、「メアリー、無理しないで」、「もしもし?もしもさぁ」などが演奏される際のステージ、フロアもきっとそういった空気を多分に含んでいるだろう。その美しさ、光はきっと部屋やライブハウスの外へ出たあとも他の誰かへ向けられていく。また育まれていく。「しゃらら -Taale Zameen Pal-」もそういった曲のひとつだ。
馴染みきれない世間との軋轢も夢見心地に昇華され、迎えるはクライマックスのような9曲目「らぶりありてぃ -la dolce vita-」。原曲はオートチューンがかっており、流麗なメロディー、フロウと相俟って夢と現実、どちらともとれない浮遊感を際立たせていた。
新たなアレンジでは湿度の高低と、超然とした人間の情念をより強く感じられる。原曲が宇宙のような空間そのものを表現しているとすれば、「-la dolce vita-」は宇宙をイメージする人間の有り様と爆発を表現しているように思える。脳と生身で歩んできたこのアルバムのオーラスに相応しいリアレンジ。ハイパーポップ的にデジタルで止め処ない刺激もありながら、身体性は損なわれず空疎にもならない有機的な作品群。両極端な感情、理論、サウンドが多種多様に織り込まれたアルバムだからこそ、ほとんどディストピアな現代社会に生きる私たちの、ややこしい胸の奥深くを切実に打つ。
Aメロでの鼻にかかった平熱感ある独白のようなボーカルは、人間臭い情けなさや哀愁、以降の昂りを引き立たせていてたまらない。原曲ではメランコリックな響きを多分に持っていた楽器隊の音も、こちらのアレンジでは起伏ある情動に合わせるかのように、より抑揚深い音の動きを見せる。地に足着けて歩むロマンチシズム。teto「LIFE」でもドリーミーに歌われた、この目に映る"真実よりずっと綺麗な"リアリティへの愛。
宇宙をイメージしている間はイメージ通りの宇宙に居るに等しい。愛を想像する孤独な時間が愛を生むのだ。
暗く冷たいコンクリートジャングルをふらふらぼろぼろと歩く中で差し込む光は何よりも眩しくあたたかい。きっとまたどこかで誰かと手をとり合える。
サンプリングのようなボーカルも加わる最終盤では、大きくなった自分もインナーチャイルドも、持ち合わせた男性性も女性性も、愛も平和も夢も現実もすべてないまぜになって理想郷へぶっ飛ぶようなカタルシス。脳も眼もかっぴらく。ここが地獄かなんて今や考えてもいない。
無粋なマジレスは求めていない。混じり合う宇宙間で起こるこんな大爆発を待っていた。
大爆発後、アルバムのエンドロールの如く流れる10曲目は「吾亦紅」。ローファイかつノスタルジックでちいさな始まり方は、実家で埃かぶるオルゴールを思い起こさせる。あれはどんなメロディーだったか思い出せないけれど、木造建ての窓から見える青空と黄緑色の風景、海辺から漂う腐った藻の匂いだとかを思い出した。変わりゆく町並みと人波。色褪せども揺らぐことなき思い出。「あなたは変わってしまった」と言う、変わってしまったあなた。変わるし変われない自分自身。いいこともあったし悪いこともあった。
それらを抱きしめるようでもあり、突き放すようでもある。殊更に美化しない。楽観と諦観が表裏一体に同居した曲。teto「手」など地続きでカラッとしたあたたかさ。the dadadadys流「葛飾ラプソディー」のような趣も感じられる。
観念的なことは解が出づらく変化もし得るが、あの日の出来事は間違いなく本当に起きたこと。思い出して湧き上がるこの気持ちも今は確かにあるもの。
あの時ああすればもっと、というダサい後悔も本当に思っているのだからしょうがない。
ただ、自分が今どう思っていようが、そんな気持ちも町もあの人も明日どうなっているかはわからない。全部どうにもならないかもしれないし、どうにかなるかもしれない。
それでも、そんなひとりのちいさな世界からはじまるこの曲を、どこか通じ合う5人が大きく鳴らして、私が聴いている。なにか思っている。動いていく。
思い出を振り返ってはどっぷりと浸る行為自体ももちろん劇的な刺激だ。しかし懐古にとどまらない光があるのだと、その光が地獄のような現在地と半歩先を照らし、歩き出せる瞬間もあるのだと、そう信じたくなる幕切れであった。
the dadadadysは地獄のような現実で悩み、遊び、踊りながら夢のようなリアリティへの愛を見出した。天竺へ向かう途上、織り成された『+天竺』を体感した私たちに残るのは地獄にいるでも天国にいるでもない、実感のあるあたたかさ。
シェルターやユートピア行きの切符でもない、日常という平坦な戦場を生き抜く矛と盾。40分前よりずっと見晴らしが良いようだ。この冴え切った脳で何もかも見据えて踊ろう。明日からも自分の心身で歩んでいくのだ。
（あばらガリガリで肩すっぱい）

焦ってるときや血迷ってるときに手のひらを全開にしてもってるもの全部を誰かに／何かに／どこかにさらけたいという気持ちだけに全神経が集中してるあの感じもそのときの言動もとても滑稽だったなと冷静さを取り戻した後に思うけど、そう思ってる自分すらも妙に俯瞰的で滑稽だなって思ったりもして。こう政治がどうの未来がどうの考えたところで恐らく日本単位、世界単位での変化を担う立場でもなく結局は生涯を終える間近にそういったことに関して特に何も思わないのだろうに、産まれた以上は死ぬまでただ生きてりゃいいだけ（まさに「寝て、起きて、飯食って、うんこでりゃ上等じゃん」）なのに、生活だの他人だのお金だの名誉だの思考だのに振り回されて、その時々の悩みや痛みに敏感になってるなんて、馬鹿馬鹿しいと思わずにはいられない。考えても意味ないと思うこともいっぱいあったし今後もあるだろうが、恥も苦しみも嬉しみも病みも全部が刺激で生きてる!と思える。（つまり意味ある）
今回のアルバムで、歌詞で、メロディで、全てで、脳に振動があり、それはいい刺激でありました。そしてその刺激を感じて、生きてる!!と思えた。
（そういう瞬間ってきっとないと退屈すぎて死んじゃうから、そういう感情が生まれるスパイスが大事なわけで、自分のもつその中の一つにこのアルバムがはいるっていう）
コンタクトレンズのピントが合わない状態になった時になおしたいと思うことが当たり前だけど、ピント合わないこの感じちょう新しくてサイコーじゃん!って感じです。個人的に。
直接的に語ることが得意でないのでこれアルバムの感想?みたいなレビューになってしまいました。
意図や計算、意識があるかも、何かもわかりませんが、小池貞利のかく詩と歌い方がすごく好きです。人間みをすごく感じて、そう感じる自分も人間で、なんかあたたかいです。
rock'n'roll ぎゃるが特にお気に入り。ぎゃるたましぃ・ぎゃるまいんどサイコーだからねん。常時持ち合わせよ☆
（ぴ）

ザ・ダダダディーズ
ツアー 2025
(ホォリィ)モォニングロォリィ
~ぎらぎら悶絶編~
ツアーグッズ 新発売